

黒豹注意報 5

～純情OL タンポポの嫉妬～

もくじ

黒豹注意報 5 5

番外編
乱れ散る赤い花びらに、心が甘く乱される 273

黑豹注意報 5

春を過ぎた四月下旬、辺りには色鮮やかな新緑が溢れていた。

文具メーカーの総務部広報課に所属する私、小向日葵エウカも、艶々の葉っぱに負けないくらい元氣いっぱい仕事をこなしている。

でもね、頑張つて仕事をすると、お腹が空く。これは、私が食いしん坊だからではなく、それだけ一生懸命だつて証拠なんだよ。

「さて、エネルギー補給しますかねえ」

机に向かつていた私は引き出しを開けてみるが、常備してあるはずのお菓子が無い。

「……あ。昨日、全部食べちゃったんだっけ」

がっくりと肩を落としていたその時、横から板チョコが差し出された。

「タンポポちゃん。これ、あげるわ」

優しい笑みを浮かべているのは、仲良しの中村留美先輩だ。先輩は私の苗字が小さいヒマワリだから、黄色い花繋がり私を「タンポポちゃん」と呼ぶ。

「わあ、ありがとうございます！」

クルツと椅子を四十五度回して受け取る私に、先輩が苦笑いを零す。

「相変わらず、甘いものが好きなのね」

「はい。糖分は、人間を幸せにしてくれますから」

アルミ包装を剥がし、いそいそとチョコにかじりつく。甘い。幸せー。

そんな私を見て、先輩はヒョイと肩を竦めた。

「疲れた時に甘いものを食べたくなる気持ちは分かるけど、健康のためにもほどほどにしなさいよ。そうそう。甘いものと言えば、竹若君からホワイトデーになにをもらったの？　このところゴタゴタがあつて忙しかったから、聞きそびれちゃつたわ」

「ごっつ」

先輩の言葉に、チョコが喉に詰まる。「竹若君」というのは私が三ヶ月ほど前からお付き合いしている竹若和馬さんのこと。先輩と和馬さんは大学の同級生で同期入社でもあるため仲がいいのだ。

「なんで、チョコレートで咽せるのよ？」

不思議そうに首を傾げながらも、先輩は私の背中を優しくさすってくれた。

「いえ、その……」

ホワイトデーになにをもらったのかは、言えない。いや、教えられるけど、話しているうちにそれにまつわるエピソードを思い出して赤面してしまいそうで……

——三月十四日は、仕事終わりに彼の部屋へ行った。そこでバレンタインのお返しにもらったの

は、最近私が特にお気に入りマカロンだった。

売り切れ必至の人気店のマカロンを手に入れるのは、きつと大変だったと思う。

申し訳ない気持ちでいっぱいになっていると、彼はユウカ的笑顔が見たいからと笑顔で言ってくる。

そう、ここまでは問題ない。でもその直後、『マカロンの色が、あなたの肌につけたキスマークの色に似ていると思いませんか』と『言い出し……』

しかも、そこで終わらないのが和馬さん。

寝室に連れ込まれ、普段よりもたくさんのキスマークを付けられ、『やはり、あのマカロンの色とキスマークの色は同じですね』と、嬉しそうに言われたのだ。

このくらいならば、恥ずかしがり屋の私としてもギリギリセーフのエピソード。

だが、この後に待ち受けていたのは、完全アウトな展開で。

『ユウカは先程、マカロンを味わいましたよね？ ですから、今度は薄紅色に染まったユウカを、私が味わってもいいですよね？』

そう言った和馬さんはギョツとする私の全身を、くまなく美味しそうに食べたのだった。

あの一件以来、思い出すだけで全身の血が沸騰するため、大好きだったマカロンが食べられなくなってしまうたのである。

ホワイトデーのことを思い出し真っ赤な顔をしてアワアワと手を振り回す私を見て、先輩がため

息を零した。

「あー。今のタンポポちゃんの様子を見ていたらなんとなく想像がついたから、説明しなくていいわ」

「……はい」

私は気を取り直して、板チョコをバクリ。そこで、チョコも鬼門だったと今さらながらに思い出す。甘いものをしょっちゅう口にしている私を見た彼が、『カロリー消費のためには運動しましょう。協力しますよ』と笑顔で言っただけ、これまた私を寝室に連れ込んだこともあったのである。

和馬さんはなにかにつけ、私に手を出し、寝室に連れ込む。恥ずかしいから、控えてほしい。

それでも、普段は私のために色々と気配りしてくれたり、溢れんばかりの愛情を注いでくれたりと、本当に素敵で自慢の恋人なのだ。

「竹若君がタンポポちゃんを溺愛しているのは、相変わらずのようね。仕事ができる上に容姿も抜群にいいし、恋人にもとびきり優しいなんて、これじゃあ、新入社員のお嬢さんたちはひとたまりもないわ」

「ですよねえ。入社式早々、和馬さんのファンになった人も多かったですし」

困りながら笑う私の頭を、先輩のほっそりとした指がソツと撫でてくる。

「色々、大変だったわね」

「いえ、そんな。あの時は留美先輩にはいっぱい迷惑をかけちゃって、すみませんでした」

「タンポポちゃんが謝ることじゃないわよ。竹若君は、付き合いの長い友達だもの。困っているなら、少しは助けてあげないとね」

新入社員たちの入社直後、先輩は和馬さんを追いかけて回す人たちを牽制し、私や和馬さんを守る防波堤の役目をしてくれていた。

「彼の本性を知ったら、先輩のお嬢さんたちもさっさと離れていったんでしょうけど」

先輩が、遠い目をしてポソリと呟く。

「は、ははは……」

先輩の言葉に、力なく笑う私。

普段の和馬さんは物静かで爽やか和風美青年だが、思考回路が宇宙人なのである。

私が『先輩ができて嬉しい！ 素直で可愛い！』とはしゃいでいると、『ならば総務部への異動願いを出して、社長秘書を辞めてしましましょう。そうすれば、あなたの後輩になれますからね』と、割と本気で言うのだ。

彼から宇宙的発言が飛び出すたびに、私はドキツとしたり冷や汗をかいたり、心臓がいくつあっても足りないほど。

それでも、そんな彼を見られるのは嬉しくもある。だってプライベートの彼の顔を知っているのは私だけだから。

「顔がいい人って、やたらと言い寄られて大変よね。追い払うためには、きつい言葉を浴びせない

といけないこともあるでしょうし」

先輩の言葉に、私は深く頷く。

「無表情で冷たい言葉をかける和馬さんに、ものすごくビックリしましたけど。おかげで、その日以降、追いかけて回す先輩が減ったみたいでよかったです」

「ホントよね。だけど、かえって面倒な事態になっちゃったわよねえ。あの展開は、まったく予想していなかったわ」

先輩の言う予想外の事態とは、私のそっくりさんが登場したことだ。しかも三人。

「タンポポちゃんに似せれば竹若君の彼女に選ばれるかもしれないなんて発想、いったいどこから出てくるのよ」

留美先輩が盛大なため息を吐く。

先輩の様子に、私は苦笑い。

「和馬さんが私と他の人に対する態度を区別したせいで、そう思ってしまったみたいですね。和馬さんの恋人になったら、こんな風に大事にしてもらえるって」

「ともあれ、大ごとになる前に騒ぎが収まったのはよかったですわね。ああ、竹若君から聞いたわ。タンポポちゃんが幸せな恋愛とはなにかって、その後輩を説得したんでしょう？」

「説得というほど、立派なものじゃなかったですよ。自分の考えをそのまま言葉にしたから、グチャグチャで伝わりにくかったでしょうし」

照れくささを微妙な笑顔で誤魔化していると、先輩が優しく笑った。

「あなたの言葉が心に響いたから、竹若君のことを誦められたのよ。……タンポポちゃん、随分成長したのね」

「そうですね！ いつまでも新人じゃないですし、恋愛経験値だつて上がっているんです！」得意げに胸を張ると、ニンマリと笑った先輩が長い指で私の胸を軽く突つつく。

「そうかしら？ ここはあんまり成長していないみたいよ」

私はその手を、パシッと払った。板チョコの恩なんて、知るもんか。

「ひ、ひどい！ ここは努力だけではどうにもならないのに！」

自分が大きいからって、そのセリフはひどすぎるのではないか。

先輩に向かってベーツと舌を出していると、うしろから長い腕が回ってきて、椅子の背ごとキユッと抱き締められる。

「では、私が協力してあげましょう」

「は？ え？」

耳に心地よい声でささやかれ、慌てて振り返る。そこには、ニコニコと笑っている和馬さんがいた。

「あ、あの、協力って……」

「ユウカの胸を私の手でたっぷりじつくりマッサージすれば、そのうちに大きくなるかもしれないよ。昔から言うではありませんか。男性に胸を揉まれると、その刺激で大きくなると」

「それ、なんの根拠もないって証明されているから」

留美先輩が無表情で突っ込んでくるものの、和馬さんは笑顔を崩さない。

「そうですか？ ですが、可能性がないとは言いきれないですよ。ものは試しです。さっそく今晚、たっぷりじつくり」

「け、け、け、結構です！ お気遣いなく！」

勢いよくブンブン首を振ると、さらに強く抱き締められた。

「ユウカ。恋人の私に遠慮はいりませんよ。日頃から体を鍛えているおかげで、数時間は揉みしだく持久力があるはずですよ」

「す、す、数時間!？」

「……竹若君、職場でそれ以上の言葉は慎みなさい。立派なセクハラよ」

無表情に加えて半眼になった留美先輩が、冷たく言い放つ。

「そうですね。では、ユウカ。続きは今夜、私の部屋で」

艶っぽい低音でささやかれ、私は顔が熱くなったり血の気が引いたり忙しない。

「ひいひい！ せ、先輩、助けて！」

「無理よ。私でも、竹若君の暴走は止められないもの。じゃ、タンポポちゃん。胸のサイズが大きくなったら、報告してね」

頼みの綱であった留美先輩が、右手をヒラヒラさせて去ってゆく。

「うわああん！ 先輩の薄情者……！」

恋人は通常運転で暴走し、先輩は私をあつさりと裏切る。
それでも、私は幸せです。

……たぶん。

第一章　ときめきと不安に揺れる春

1　私を悩ませるもの

新入社員が配属されて一ヶ月が経った。

初めは緊張でガチガチだった彼らも、今ではだいぶ表情が柔らかくなり、仕事にも慣れてきたようだ。

そんな彼らの成長を感じとり、私は微笑ましい気分ではいっばいになる。うむ、うむ、お姉ちゃん
は嬉しいぞ。

相変わらず彼らの姉気取り（もちろん、自分の心の中でだけだが）の私は、徐々に独り立ちを始
めた後輩たちを眺めつつ、仕事に励む。

五月に入り、社内はすっかり落ち着いてきた。

つい何日か前までは、和馬さんに想いを寄せる後輩たちの騒動が巻き起こっていたけれど、それ
についても今では収まっている。

そういったこともあり、私の精神状態は安定していた。

だからといって、この先、同じようなことが起きないとは言えない。素敵な人を彼氏に持つのは、

どうも気が休まらないということを実感する今日この頃だ。

別に、和馬さんの浮気や心変わりを心配しているのではない。彼はいつだって、私のことを目いっぱい愛してくれている。視線にも、表情にも、仕草にも、私に向けられる和馬さんのすべてが、愛情に溢れている。

だから、これは、私の気の持ちようなのだろう。

なにが起きても、誰が現れても、不安を感じない日は来るのだろうか。

——いつまで経っても、自信満々にはなれそうにないなあ。

午後の仕事が一段落した私は、社員通用口そばの自販機で買ったカフェオレを飲みながら苦笑する。

ちょうどその時、お使いに出ていた留美先輩が通用口から入ってきた。

「先輩、お帰りなさい」

「ただいま」

声をかけると、ニコツと笑った留美先輩が丸椅子に座っている私のところにやってくる。

「私も喉が渴いちゃったわ。なにか飲もうっと」

そう言っただけ先輩はアイステイを購入し、隣に座った。

そんな先輩をなんとなく眺めていると、チラリと視線を向けられる。

「タンポポちゃん、どうしたの？ 浮かない顔をしているけど」

留美先輩は鋭い。この先輩の前では、隠しごとをするのも一苦労だ。

だけど、もともと隠し通すつもりもなかったし、なんとなく聞いてほしかった部分もあるので、私は自分が抱える不安を話した。

話を聞き終えた先輩は、コクリとアイステイを一口飲む。そして軽く座り直して、私へと体を向けた。

「ねえ、タンポポちゃん。あなたは週末は竹若君と一緒にたわよね？」

問われて、頷き返す。

前々から行ってみたかった隣県にあるオルゴール博物館に、和馬さんが連れて行ってくれた。そこで買ったお土産を先輩に渡したので、私たちが一緒にいたことを先輩は知っている。

浮かない表情のままの私に、先輩はまた問いかけてきた。

「明日からの連休も、同じように一緒にいるんでしょう？ 今日の午前中、竹若君に会ったんだけど、

『休みの間は、ずっとユウカを独り占めできます』って、そりゃあもう、嬉しそうだったわ」

ふいに聞かされた話は赤面ものだった。

——和馬さん。なに言ってるの！

アワアワと口を開閉していると、先輩がクスツと笑う。

「そんなに仲がいいのに、なにが心配？ ……ま、タンポポちゃんの気持ちも分からなくはないけど」

同じ大学に通っていた和馬さんと留美先輩。

友人ということで、共に行動をすることが多かったという。なので思い当たる節があるらしく、

先輩は小さく笑った。

「竹若君、モテるものねえ。付き合っている彼女がいた時でも、他の女の子たちがなにかにつけてまとわりついていたし。今だって、後輩のお嬢さんたちが、竹若君を見かけては相変わらずキヤー言っているみたいだし。さすがにもう、厄介な騒ぎを起こす子はいないだろうけど」

先輩は肩をヒヨイと竦める。

そうなのだ。和馬さんに直接声をかける後輩たちはいなくなったものの、彼の人気^{わらわ}が衰えたわけではないのだ。

私は空になった紙コップを手の中で弄びながら、ポツリと零す。

「どうしたら、彼女としての自信が持てるんでしょうか？」

和馬さんは、不安を抱えたままの私でも構わないと言ってくれている。だけど、こんな自分は、私自身が嫌だった。

ため息まじりに口を開いたところ、

「ん、手っ取り早く、結婚しちゃえば？」

と、先輩はあっけらかんとした調子で言っただけだ。

「はい!?」

パチパチと瞬きを繰り返す私に、留美先輩はニツと口角を上げる。

「そうしたら、誰もあなたたちの間に割り入ろうとしないでしょ。タンポポちゃんだって、夫婦という関係になれば、恋人同士でいるよりは安心できるんじゃない？」

先輩が言うとおり、彼の戸籍に入れば、社会的にも私と和馬さんの関係は明確なものとなる。なるけれど……

「で、でも、まだ、結婚とか、そこまでは考えてなくて！」

先輩の提案は、飛躍しすぎている。

恋人としてやっとなら、和馬さんと向き合えるようになってきたところなのだ。

慌てふためいた私は、思わず、手の中の紙コップを握り潰してしまった。

そんな私を見て、先輩は苦笑を深める。

「ふふっ、あくまでも一つの案よ。今すぐ結婚しろとは言っていないんだから、そこまで慌てることもないでしょ」

そう告げてくる先輩は、ふと、なにかを思いついたような表情をした。

「だけど、このことを竹若君に教えたら、『とりあえず、明日にでも入籍だけ済ませてしまいましょ。結婚式は、おいおい』とか言いそうよねえ♪」

楽しそうに声を弾ませている先輩に対し、私は顔を引きつらせる。

「せ、先輩！ お願いですから、このことは和馬さんに話さないでください！」

「え、どうしようかなあ」

「お願いします！ 和馬さんと結婚したくないわけじゃなくて、まだ、そのタイミングじゃないっていうか！ だから、ええと、とにかく話さないでください！ お願いします！」

ニマニマと意地悪く笑う先輩の腕を掴んで、ガクガクと揺さぶる。

和馬さんの行動力はハンパない。これまでだって——あくまでも、彼の口から一方的にはあるが——、入籍や結婚式の話が出ていたのだ。

私と先輩が結婚についての話をしていたと知られたら、今度こそ押し切られるかもしれない、という不安が拭えない。

和馬さんはようやく恋人という立ち位置に慣れてきた私に、『焦ることはないですから』と言ってくれてはいる。でも、結婚に対して、ものすごく前向きであることはヒシヒシと伝わってくる。時にそれは、彼の行動にも表れていて……

つい先日、一年ほど前に寿退社した女性社員が、お昼休みに赤ちゃんを連れて会社にやってきた時のこと。

その人は同じ広報課で、私と一緒に社内報を担当していた。入社当時、不慣れな私にいつでも根気よく教えてくれて、本当にお世話になった先輩だ。

私とは十歳離れていたものの、水族館好きという共通点から、結構仲がよかった人である。

『うわあ。可愛い赤ちゃんね!』

『目がパッチリ』

入り口付近で盛り上がっている人だけに、私も駆け寄った。

『お久しぶりです、佐藤先輩。……あつ、苗字が本田に変わったんですよ。ごめんなさい』
うっかり旧姓で呼んでしまった私に、佐藤先輩改め、本田先輩は苦笑を零した。

『謝らなくていいのよ、よくあることだから』

『そうは言っても、名前を間違えるなんて失礼なことを……』

『本当に気にしないで。でも、こういう時に、つくづく実感するのよねえ』

『なにをですか?』

『結婚したなって。式を挙げたり、夫や子供との日々の生活でも感じるけど、苗字が変わったことが、私としては一番、結婚したんだって実感するわ』

そう言った本田先輩の笑顔は、幸せいっぱいだった。

この日の終業後。総務部に迎えに来てくれた和馬さんと一緒に、地下駐車場へと向かった。そこで本田先輩との話を和馬さんにすると、彼が少し考え込むような表情に。

『あの、どうしたんですか?』

急に黙り込んでしまった和馬さんが心配になって声をかけたところ、すぐに優しい笑顔が返ってくる。

『いえ、大したことではありませんよ』

『本当ですか? どこか痛かったり、熱があったりしませんか?』

彼の正面に回り込んでジッと見上げると、改めて微笑みかけられた。

『私はいたって健康です。……ああ、そうです。ユウカ、少しだけ寄りたいたところがあるので、待っていてもらってもよろしいですか?』

そう言って車を発進させた和馬さんは、ある場所で路肩に車を止め、降りてしまった。

ここは本屋や薬局、ブティックが並ぶ通りだ。和馬さんがどこに向かうのだろうかと目で追っている時に、スマートフォンが友達からの電話を着信。

話が盛り上がり、気付けば三十分近く経っている。通話を終わると、タイミングよく和馬さんが戻ってきた。

『お待たせしました』

『いえ、大して待っていませんよ』

車に乗り込んだ彼に私がそう返事をした時、和馬さんが楽しそうな笑みを浮かべる。

そして小さな紙袋を差し出し、『プレゼントですよ』なんて言ってくるから、飴でも入っているのかと嬉々として中を覗くと……

なんと、『竹若』と彫られた、立派なハンコが入っていた。

ギョツと目を大きくした私は、ハンコと和馬さんを高速で交互に見遣る。そしたら――

『いずれ私と同じ苗字になるユウカのために用意しました。一日でも早く、ユウカがこのハンコを使う日が来るといいのですが』

と、ものすごくいい笑顔で言ったのである。

――そりゃあね、私が和馬さんと結婚したなら、苗字が小向日葵から竹若に変わるだろうけどさ！ でも、いくらなんでも早すぎじゃないの!?

口をパクパクと開閉していると、和馬さんの切れ長の目がユルリと弧を描いた。

『いつそのこと、人事部に変更届を出してしまいませんか？』

『はい!?!』

先程の動揺が収まらないうちに意味不明な発言を耳にして、私は思わず素っ頓狂な声を出してしまふ。

すると、慌てふためく私に向かって、和馬さんが静かに手を伸ばしてきた。

大きな手が、やんわりと私の頬を包む。

『あなたが竹若ユウカになることは決定事項ですので、この際、登録情報の変更をしてはいいかと。そのハンコの出番もあるでしょうし』

『ま、待ってください！ 変更届は将来的に提出する可能性はありますが、今はまだ小向日葵ですから！』

『でしたら、これから役所に行つて、籍だけでも入れてしましましょう。そうすれば、あなたは正式に竹若ユウカですよ。堂々と、そのハンコが使えますね』

優しい首を傾げた和馬さんが、私の頬を撫でながらニッコリと微笑む。

そんな彼に、私は涙目でブンブンと首を横に振り続けたのだった。

……いや、その、和馬さんが私との結婚を考えてくれているのは、嬉しいよ。嬉しいけれど、いくらなんでも気が早すぎる。

しかし、彼はことあるごとに、こんな感じで結婚を意識させてくるのだ。そんなに焦らなくても、私は和馬さんから離れることなど考えていないのに。

数日前のことを思い出して必死になる私を見て、先輩は「分かった、分かった」と、頭をポンポンと叩いてきた。

「慌てるタンポポちゃんが面白い……、うん、可愛いから、ちよつとからかっただけよ」

——今、明らかに「面白い」って言いましたよね？

突っ込みたいが、ここは大人しくしておいたほうが得策だろう。

私は先輩から手を離し、そつとため息をついた。

すると、先輩は改めて私の頭を撫でてくる。

「初めてできた恋人にあれだけ大事にされていたら、浮かれて、すぐ結婚に飛びついてもおかしくないのに……。タンポポちゃんはやたらと悩みがちだけど、それだけ、竹若君との将来を真面目に考えているのよね。そういう真面目で一生懸命なところ、私はいいと思うわ」

「留美先輩？」

見上げた先には、優しく微笑んでいる先輩がいる。

「でも、竹若君が先を急ぐ理由も分かるから、ちよつとずつでも前に進んであげてよ」

「理由ってなんですか？」

不思議に思い問いかけると、先輩はわずかに眉尻を下げた。

「ほら、これだものねえ。竹若君が少しでも早く、タンポポちゃんを囲い込みたいのも無理はないか」

首を傾げていると、先輩は私をチロリと睨んできた。

「他の部署の社員からも、お菓子をもらっているでしょ？ しかも、基本的に男性社員ばかりよね？」

「えっ!? ダメなんですか!? だって、くれるっていうものを、断ったら悪い気がして」

というか、お菓子大好きな私が、断れるはずないだけなのだが。

もしかして、『総務部には、食いしん坊な社員がいる』とか噂されて、他の部署から笑われているのだろうか。そのことを、先輩はよく思っていないのかもしれない。

「すみませんでした。確かに、この年になって、お菓子をもらってはしゃいでいるのはみっともないですよね」

ペコリと頭を下げると、先輩はまた肩をヒョイと竦めた。

「これじゃ、竹若君の気苦労は半分減りそうにないわね。そういうところが、タンポポちゃんらしいけど」

クスクス笑う先輩は、軽く握った拳で私のおでこをコツンと小突いてくる。

「これ以上、竹若君を焦らせたくないなら、やたらにお菓子をもらわないことね」

「はあ……。気を付けます」

いまいち理解はできないが、先輩の言うとおりにしておいたほうがいいのだろう。

私は大きく頷き返したのだった。

大好きなカフェオレを飲んで、留美先輩とおしゃべりしたら、ちよつと元気が出た。

その後は気持ちを切り替えて、仕事に集中する。どうしたら、自分に自信が持てるようになるのか。どうしたら、自信満々で和馬さんの隣に立てるのか。そんな方法があるのなら教えてほしい。だけど、明確な答えが書かれた参考書なんて、どこにもない。だから、答えはちゃんと自分で出さないといけないのだろう。今の私がいくら考えても、さっぱり分らないけれど。そういう悩みはあれど、仕事は仕事だ。きちんとしてはいけない。プライベートなことでモヤモヤしているからといって、誰も大目に見てくれないのだ。恋でも仕事でも、とにかく、目の前にあることを——どんな小さなことでも——地道に一つ一つこなしていくしかない。その達成感が、きっと私を成長させてくれるはずだから。

黙々と作業を進めたおかげで、終業時間を迎える前には仕事を終えることができた。

パソコンにとらめっこを続けたおかげで目がしょぼしょぼして、おまけに肩が凝ったものの、それはそれで心地よい疲労感だった。

「さてと、帰ろうかなあ」

デスクの上を片付けていると、バッグの中でマナーモードにしていたスマートフォンが震え始める。

取り出して画面を見ると、メールの着信が一件。『お疲れ様です』で始まる和馬さんからのメールには、仕事が終わったので、これから総務部に行くと言っていてあった。

「本当に、ママな人だよな」

画面を眺めながら、小さく笑う。

和馬さんが残業にならない限りは一緒に帰るというのに、それでもこうして必ずメールを送ってきてくれる。

それがすごく嬉しい。

付き合いだして落ち着いてきたら、こういった気遣いはなくなっていくものだと思っていた。友達からは、そんなものだと聞いていたから。

ところが、和馬さんは付き合いだしてからも、ママで優しいまま。

たかがメールかもしれないが、その些細なことが嬉しくて、くすぐったくて。文面をそっと指で撫で、ついつい笑ってしまう。

すると。

「ユウカ、なにを笑っているのですか？」

高い位置から、耳に心地いい、やや低めの声が降ってきた。

「え？」

ハッと顔を上げると、目の前に和馬さんが立っている。

「あれ？」

いつもよりだいぶ早い登場だ。

このメールが送られてきたのは、今しがたのこと。いくら総務部と社長室が同じフロアにあるとはいえ、こんなにも早く来られるものだろうか。

パチパチと瞬きまばたをしていると、和馬さんがフツと楽しそうに笑う。

「あなたに少しでも早く会いたくて、休憩時間にあらかじめ文章を打ち込んでおいたのですよ。送信するだけでしたら、歩きながらスマートフォンを操作しても周囲にはさほど迷惑ではないでしょうし」

笑顔の彼とは対照的に、私の表情はわずかに曇る。

「あの……、わざわざメールをしなくてもいいんですよ？ こうして仕事が終わったら、すぐに会うんですし」

すると、和馬さんの形のいい眉がわずかに下がった。

「もしかして、私からのメールは迷惑ですか？」

「違います」

私は首を横に振る。迷惑だなんて、これっぽっちも思っていない。

「そうじゃありません。そこまで気にかけてもらうのは、どうも悪い気がして……」

仕事終わりにメールがなかったからといって、いちいち寂さびしがたりはしない。愛情が薄れたのだと勘違かたがひいして、悲しくなったりはしない。

それに、私は和馬さんのように自分から連絡をすることがほとんどない。そのことに、ちよつと

引け目を感じていたのだ。……私がするより先に彼から連絡が来てしまうので、仕方ないと言えはそうかもしれないけれど。

モゴモゴと口ごもりながらも伝えると、和馬さんは安心したように微笑ほほえみを浮かべる。

「なにを言うのですか？ 私が好きでしていることですから、あなたが気に病やむ必要はありません。迷惑でなければ、今後も私からの連絡を受け取ってくださいね」

彼の目が柔らかに弧こを描いた。

その笑顔とセリフで、ホワツと頬ほほが熱を持つ。

相変わらず、和馬さんは甘くて優しい。付き合いだして三ヶ月になるというのに、いつだって、たくさんの愛情を向けてくれる。

なのに私は照れるばかりで、うまく言葉にすることができない。それどころか、あまりにまっすぐな和馬さんの視線にドキドキしてしまい、咄嗟とつさに俯うつむいてしまった。

「ユウカ？」

不思議そうに私を呼ぶ和馬さん。

私はそんな彼にクルリと背を向け、スマートフォンのメール作成画面を呼び出す。ちよこちよこと指を動かし、素早く送信。

「ユウカ、どうしたのですか？」

和馬さんがふたたび声をかけてきたところで、微かすかな振動音が私の耳に届いた。

「おや、メールですね。どなたからでしょうか。……社長からでしたら、削除してしまいま

しよう」

おかしなことを呟いた和馬さんが、スーツの上着ポケットからスマートフォンを取り出し、メール画面を開いた。

彼の様子を横目でチラチラ窺いながら、私は自分のスマートフォンを胸に引き寄せて両手でギュッと握りしめる。

和馬さんは送信者が私だと気付き、少しだけ首を傾げた。

その数秒後――

「ユウカ、なんて可愛らしいことを……」

小さく呟いて、フワリと優しい表情になる。

「照れ屋なあなたなりに、こうして一生懸命に愛情を示してくれるとは。ああ、私はなんて幸せ者なのでしょうか」

スラリと長い指で、私の髪を撫でてきた。

周りには、まだ人がいる。

そんな状況ではいまだに甘い言葉を伝えられない私は、メールに気持ちを込めたのだ。文字にするほうが、口で言うよりも伝えやすいから。

『メールも電話も、すごく嬉しいです。私も、少しでも早く和馬さんに会いたかったですよ』

言葉にすれば、あつという間に伝わるにもかかわらず、こんなまどろっこしい方法を選んだ私に呆れることなく、和馬さんはすごく嬉しそうに笑ってくれた。

「口にした言葉であろうと、文章であろうと、ユウカの気持ちには変わりありませんから。どんな方法でも、私は嬉しくて仕方がないですよ」

サラサラと髪を撫でていた手が、最後にボンと軽く頭にのせられる。

「さあ、帰りましようか」

穏やかに伝わる温もり。優しい笑顔。なにより、和馬さんがすぐそばにいてくれること。それはカフェオレよりも、留美先輩のおしゃべりよりも、私の心を弾ませてくれる。

―― どうしよう。和馬さんのことが、どんどん好きになってる。

そんなことを、こっそり思った。

すると、「私も、ユウカのこと、ますます好きになっていきます」と、まるで心の中を読んだかのようなことを言われた。

「え？」

驚いて顔を上げると、彼の口角が緩やかに上がる。

「あなたが考えていることは、大抵分かれますよ。愛の力です」

―― なんか、怖いんですけど……

あまりに鋭すぎる彼の勘は、今度は別の意味で私の心臓を弾ませた。

色々な意味で心臓をドキドキさせていた私は、和馬さんに連れられて地下駐車場へと向かう。他愛のない話をしているうちにどうにか落ち着き、スーパーでの買い物中も奇声を発したり、挙動不審になることもなかった。やれやれである。

夕食用の食材を買い終えると、もちろん、向かう先は和馬さんのマンション。普段から彼にしてもらうことばかりで、私からしてあげられることは、ほとんどなかった。だからこそ、私の取り柄である料理を和馬さんにふるまいたい。

仕事の後ということで、彼が『疲れているでしょうから、ユウカさえよければ外食にしませんか?』と、お約束のように声をかけてくれた。

だけど、私が作る物は手のかからない家庭料理ばかりなのだ。材料さえ揃えてしまえば、大した作業ではない。

彼にそう伝えながら、並んでマンションの廊下を歩く。すると食材の入った袋を手に掲げた和馬さんは、いつもと同じく申し訳なさそうな顔で微笑む。

「ユウカの料理はいつも楽しみです、それがあなたの負担になつていないかと心配になります」
強引な言動も多いけれど、彼は基本的に私への気遣いを絶やさない人だ。

そんな彼に、ニコツと笑いかけた。

「楽しみにしてくれているのであれば、なおさら作らせてください」

「もちろん、楽しみに決まっています。ですが……」

形のいい眉を少しだけ下げて、途中で言葉を止めた和馬さんが私を見つめる。

私はさらに笑みを深めた。

「和馬さんと付き合う前だって、家に帰ったら夕食を作っていたんです。一人分多く作るくらい、負担になんてなりませんよ」

それでも、彼の表情はあまり晴れない。

——うーん、どうしようかなあ。……まあ、仕方がないか。

恥ずかしさよりも、和馬さんを元気にしたい気持ちの方が勝る。そこで、ダメ押しのように言う。

「私が和馬さんと結婚したら、朝食もお弁当も夕飯も毎日作ることになると思うんです。そのたびに、和馬さんは申し訳ないって言って、私に料理をさせないつもりですか?」

足を止めた私は、同じように足を止めている彼の顔を下からジッと覗き込む。

私だって、たまにはこんなことも言えるようになったのだ。なに気ない振りをしているものの、内心はものすごくドキドキしているけどね。

このセリフに、和馬さんがハッと息を呑んで固まった。

「ユウカ……」

切れ長の目を大きくしている彼に、ジワジワと耳が熱くなるのを感じながら続けて告げる。

「だから、遠慮も心配もしないでくださいね」

と言った瞬間、和馬さんに抱き寄せられた。

荷物を持っていない左腕で私の肩を引き寄せ、ギュと自分の胸に押し付ける和馬さん。

まさかの展開に、私は大いに慌てた。

「和馬さん、ここは廊下ですって！ 離してください！」

今は誰もいないけれど、いつ人がやってくるか分からないのだ。腕の拘束を解こうと、必死にもがく。

しかし、和馬さんはまったく力を緩めてくれなかった。

「先程、あなたが言ったんですよ。遠慮するなと」

いつそう私を抱き込み、髪に頬擦り。さらには、つむじにキスマまでしてきた。

——や、や、や、やーめーてー！

「そういう意味じゃないんですよ！ お願いですから、離してください！」

両手でグイグイと彼の胸を押し返していたところ、「分かりました」と、小さく笑った和馬さんがようやく私を解放する。

とはいえ、油断は禁物なのだ。すかさず大きく一歩下がり、火照った顔で彼を睨みつける。

「なにをするんですか！」

こっちは恥ずかしさで全身から火を噴きそうだというのに、和馬さんは穏やかに微笑んでいた。

「あまりにも嬉しいことを言ってくださるから、つい、抱き締めたくなりまして」

少しも悪びれない彼に、なおも言い放つ。

「『つい』じゃ、ありませんよ！ いつも言ってるじゃありませんか。人目に付くところでは、こういうことをしないでくださいなねって！」

彼に触れられたくないのではなく、恥ずかしいからやめてほしいのだ。誰にも見られないところ

だったら、まだ平気だけど。

猫が毛を逆立てるがごとくフーフーと息巻いていると、和馬さんがすぐくいい笑顔になった。

見惚れるほど素敵な笑顔であるはずなのに、私の背筋がゾクリと震える。今まで熱くなっていた顔から、徐々に血の気が引いてゆく。

「あ、あの、和馬さん？」

戸惑い気味に声をかけると、彼がソツと首を傾げた。

「……では、人目に付かない場所であれば、なにをしてもいいということでしょうか？」

艶を含んだ声で、ゆっくりと告げた和馬さん。ユルリと弧を描いた切れ長の目が、私をジッと見つめてくる。

和馬さんに無用な遠慮と心配をしてほしくなかっただけなのに、それがどうして、こういう展開に!?

思い切って口にしたセリフがこんな結果をもたらすのであれば、もう二度と言うもんか！

得体の知れない恐ろしさでブルブル震えていると、和馬さんがクスリと笑った。

「自主的に言ってくれないのであれば、言わせるまでですよ。ええ、どんな手を使ってでも」

——ひええええっ！

またしても心の内を読まれたことと、獲物を前にした肉食獣のような笑顔に、私の体はさらに大きく震えたのだった。

彼の微笑みに戦々恐々としていたところ、ふいに和馬さんが表情を緩める。

「さあ、中に入りましょう」

鍵を開ける彼の横顔は、すっかりいつもの好青年だ。

それにしても、和馬さんは結構コロコロと表情が変わる。

基本的には穏やかな笑顔なのだが、笑顔にもいくつかのパターンがあった。

さっきのように有無を言わせないオーラをまとった笑顔になる時もあるし、ちよつぱり意地悪く笑う時もある。

そういえば以前、留美先輩が、『竹若君は表情が乏しいのよね。無表情で訳じゃなくて、曖昧に微笑むばかりだったの。でも、それって、不用意に人を近付けさせないための防御策だったのね』と言っていたことがある。

これだけかっこいい和馬さんのことだ。うっかり親し気な雰囲気を出せば、女性たちがこぞって押し寄せたことだろう。うまい具合に他人と距離を取っていた学生時代でも、彼に近づく勇敢な女性が絶えなかったというのだから。

それが私の前では、色々な顔を自然と見せてくれていた。こういう時に、自分は彼にとって特別なんだなって思える。

恋愛に興味はあっても、心を動かされることがなかった私が、初めて本気でドキドキした人が和馬さん。彼だけが、私にとって特別だ。

その和馬さんが、同じように私のことを特別だと思ってくれている。それがすごく嬉しい。

リビングにバッグと上着を置き、和馬さんの部屋に置かせてもらっているエプロンを身に着ける。

「じゃ、ご飯を作っちゃいますね」

彼に一言かけてからキッチンへと向かう。

今夜のメニューはカレーライス。和馬さんのリクエストだ。

時間がないから、市販のルーを使う。でも、そのままじゃなくて、ちよつと手は加えるけどね。

仕上げに、ウスターソースとケチャップをほんの少し入れる。この二つの調味料はスパイスやフルーツが絶妙に配合されているので、市販のルーで作ったカレーを簡単にグレードアップさせられるのだ。

——和馬さんも、美味しいって思ってくれればいいなあ。

野菜を洗ったり、切ったり、炒めたりと、彼の喜ぶ顔を想像しながら調理を進めてゆく。

そんな私を、いつもと同じくキッチンの入り口の壁に寄りかかるようにして立つ和馬さんが見守っていた。

まるで大事な宝物を眺めるような優しい視線に、私はいつまで経っても慣れないでいる。

過去には、ジツと眺められているよりは、手伝ってもらったほうがいいだろうかと考えたこともあった。

けれど、彼と一緒に料理をすると、少し面倒な事態が起こったのである。

泥のついた野菜を洗っていると、私の背後から腕を伸ばして一緒に野菜を洗い始める。つまり、私は彼の腕に閉じ込められた状態となってしまう。

食器を取ろうとして私が背伸びしても届かない場合は、なんと、和馬さんが私を抱き上げて取らせてくれるのだ。

味見の時だってそう。

例えば、煮物の野菜を爪楊枝に刺して彼に渡したとする。和馬さんはその野菜を半分だけかじって、当然のように残りを私へと差し戻すのだ。

『はい、ユウカ。口を開けてください』

『い、いえ、私は……』

『ユウカ』

『こ、こっちの野菜を味見しますから……』

『ユ・ウ・カ』

といった具合に、私が折れるまで「あーん攻撃」をやめない。ちなみに、スープを味見させても、同じ状態となる。

意地悪や邪魔をするつもりがないことは分かるけれど、料理の最中に甘い雰囲気を出されても対応に困るのだ。少し離れた場所から見つめられているほうが、まだマシな気がする。

なので、『私には不用意に近付かない』という約束のもと、キッチンの入り口に立つことを許したわけなのだ。

今夜の和馬さんは、これまでになくいつそう熱のこもった視線で見つめてくる。

私はいったん手を止め、和馬さんにチラリと目を向けた。

「あ、あの、リビングでテレビでも見ていたほうが……。もうちょっと時間がかかりますし……。オズオズと話しかけると、和馬さんが目を細める。

「テレビなどより、私はユウカを見ていたのです。それとも、あなたの手伝いをしたほうがいいですか？ 遠慮は無用ですよ」

と、例の反論を許さない笑顔で問われ、私はフルフルと顔を横に振ることしかできない。

「手伝いは結構ですから、どうぞ、そこで好きなだけ見ていてください！」

ブンブンと大きく首を横に振り、私はキッチンの奥へと後ずさる。

そんな私の様子に、笑みを深める和馬さん。

「ユウカの手料理はいつも美味しいですから、カレーが楽しみです」

お世辞や愛想笑いではない、彼の心からの言葉と表情。綺麗な顔が、本当に嬉しそうに笑っている。

——なにか、特別いいことでもあった？ それとも、そんなにカレーが食べたかったとか？

心の中で首を傾げつつ、私は料理の仕上げに取りかかった。

和馬さんの視線攻撃に耐えつつ、カレーもサラダも上手にできた。やれやれである。

キッチンにあるテーブルに料理を並べ、私たちは席に着いた。

「ユウカ、今夜もありがとうございます。では、いただきます」

私の正面に座る彼が、背筋をピシリと伸ばして軽く頭を下げる。

39 黒豹注意報 5

和馬さんはいつだって、私が作った料理にちゃんと向き合ってくれるのだ。それがすごく嬉しい。ホント、和馬さんは理想的な、ううん、理想を超えた彼氏様だ。……変に暴走さえしなければ、ね。

「はい、どうぞ」

微笑みかけると、彼がスプーンを手を取った。そのスプーンがカレーを掬い、口に運ばれてから数秒後――

「本当にユウカは料理が上手ですね。このカレー、とても美味しいです。辛いだけではなくて、ほのかに甘みもあって。味が深いというのでしょうか」

と、笑顔が返ってきた。

さっきの『作ってくれてありがとう』っていうお礼も嬉しいけど、今みたいに、感想を言ってくれるのも嬉しい。ちゃんと味わってくれているのが分かるから。

彼は何度も美味しいと繰り返し、上品な所作でどんどん食べ進めてゆく。お代わりを勧めたところ、応じてくれた。私としても、作った甲斐があるというものだ。

「いくらでも入りそうですよ。毎日でも食べたいです」

空いた皿を受け取った私は、やたらと照れくさくなってしまった。

「カレーなんて簡単なメニューですから、誰でもこのくらいはできると思いますよ」

盛りつけを終えた皿を彼に差し出しながら告げると、その皿をテーブルに置いた和馬さんが私の手をそっと握ってくる。

「いいえ、それは違います。良い材料を使つてたっぷり手間をかければ、美味しい物是可以するでしょう。ですが普通の材料を使い短時間で、こんなにも美味しく作ることは難しいのですよ」

「でも、私が真面目に料理の勉強をしていけば、もともともと、豪勢なものを作れるんですけどねえ。食いしん坊の私でも、そこまでは頑張れないなあ。作るよりも、食べるほうが好きです」

彼のまつげな瞳が恥ずかしくて、わざとおどけた口調で言ってみる。
すると、重ねられている和馬さんの手に力がこもった。

「無理に料理の勉強をする必要はありませんよ」

「そうですか？ 和馬さんだって、美味しい物は食べたいでしょう？」

その問いかけに、彼の目がユルリと弧を描く。

「勉強することは、悪いことではありません。私が言いたいのは、無理に時間を割いて勉強する必要がないほど、あなたの料理の腕前が妻としてすでに十分だということです」

そう口にした和馬さんは、グイッと私を引き寄せる。

「うわっ」

急に体が前につんのめり、トトツと足が前に出た。和馬さんは体の向きを少し変えつつ、さらに手を引く。

気が付いた時には、私は彼の膝の上に座っている状態。

「か、か、和馬さん？」

立ち上がるうにも、素早く抱き締められてしまった。

私は熱くなった顔を下に向ける。

この体勢も恥ずかしいうえに、さつき彼が口にした『妻』というセリフも恥ずかしい。照れて俯く私の名を彼が何度も呼んでいるが、顔の熱さがなかなか引かないのです。と下を向いたまま。

そんな私のつむじにキスを落とした和馬さんが、穏やかな口調で話し出す。

「家での食事が美味しいということは、円満な夫婦生活を送る上で大事な項目の一つです。ですから、ユウカと私が結婚したら、それはそれは幸せな家庭が築けますよ。いつか、そんな家庭を実現させましょうね」

私の髪に頬を寄せ、和馬さんが優しい声でささやく。

彼は結婚をほのめかすことを何度となく口にするけれど、私を急かしているのではないのは分かっている。……いや、ハンコの件があつたな。

まあ、それは置いておくとして、普段の和馬さんは、それらのセリフを自然と口にしてしまっている感じなのだ。

彼の人生の中で、私と結婚することが予定されているのだと窺えて、とつても嬉しい。

恥ずかしがり屋の私は言葉にすることができないので、彼の胸に体をソツと預けるに留める。すると、和馬さんが小さな笑みを零した。

「ユウカ。予定ではなくて、決定ですよ」

我が彼氏様の勘のよさは、毎度のことながら恐ろしい。

私の心の中を正確に読み取った和馬さんに恐れおののいていると、彼がクスリと苦笑を零す。

「このままでは、せつかく作ってもらったカレーが冷めてしまいますね。名残惜しいですが、今は食事をしなくては」

ようやく彼の腕の中から解放された私は、ふらふらした足取りで自分の席に戻り座り込む。

ちよつと行儀が悪いけれど、テーブルに突つ伏した。

「ユウカは、もう食べないのですか？」

和馬さんに問われ、おでこをテーブルに擦り付けるようにして首を横に振った。

私はカレーをお代わりしていないのに、はち切れそうなほどお腹がいっぱいになっている。いや、この場合は胸かな。

とにかく、これ以上はなにも食べられそうになかった。

恥ずかしさでうずくまっている間に、和馬さんは二杯目のカレーも綺麗に平らげたようだ。

「ご馳走様でした。本当に美味しかったですよ」

その言葉と共に和馬さんは空いた食器を手に立ち上がり、シンクに向かった。

恥ずかしさにうーうーと低く呻きながら、カチャカチャという食器が洗われる音を聞いている。

初めて料理を振る舞った時に、『ユウカは料理を作ってくださいましたので、洗い物くらいは私が入りますよ』と言って、彼は決して譲らなかつた。

私という彼女ができたのだから、家のことは任せてしまってもいいのに。

ところが、和馬さんの言い分は違った。

『家事をするのに、性別は関係ありませんよ。お互いに助け合って当然なんです。恋人や夫婦とはそういうものだ、私は思っています。愛する人の助けになりたいという気持ちは、自然なものではないでしょうか』

まだどうなるか分からないけれど、結婚しても仕事は続けたいと思っっている私としては、和馬さんのような人は本当にありがたい。

あまり器用ではないという自覚があり、家事と仕事をちゃんと両立できるかどうか、少し不安だったから。

——あれ？ 私、結婚なんてまだ早いって思ってるくせに、そういうことはかり考えているかも……

その思考に、カアツと顔が熱くなった。照れくさくなって、おでこをグリグリとテーブルに押し付ける。

「ユウカ、どうしました？」

洗い物を終えた和馬さんが、不思議そうに声をかけてきた。

「い、いえ、なんでもありません……」

モゴモゴと返すと、大きな手がポンポンと私の頭を叩いてくる。

「共稼ぎであっても、あなたが専業主婦になっても、私はどちらでもいいですよ」
だから、私の心の中を読むのはやめてください。

それからしばらく顔を伏せたまま頭を撫でられていたのだが、ふいに私は和馬さんに抱き上げられた。

彼は危なげない足取りでリビングに向かうと、ソファにゆったりと腰を下ろして私を膝の上に乗せる。

慌てて立ち上がろうとするものの、お腹に回された腕がやんわりと引き戻す。

「カフェオレを淹れましたよ」

うしろから抱き締めてくる和馬さんが示す通り、目の前のローテーブルにはゆらりと湯気が立ち上るカフェオレがあった。

「さあ、どうぞ」

そう言われても、このままだと落ち着けるはずがない。

「あのっ！ これじゃ、飲めと言われても無理です！」

「おや？ この体勢が不満ですか？」

心底不思議そうな声を出す和馬さんに、私のほうが不思議でいっぱいになる。

「当然じゃないですか！ 落ち着きませんよ！」

ワーワーと騒ぎ立てていると、体に回されている彼の腕にグワツと力がこもり、私の体勢が今までのものとは変わった。

変わったけれど……

「なんで、向かい合わせにするんですか!?」
結果として、もっと恥ずかしいことになってしまった。

裾がゆったり広がるフレアスカートなので、彼の膝を跨いで座つても捲れ上がることはない。それだけは安心だ。

いやいやいや、ちっとも安心できる状況ではなかった。非常に、非常に恥ずかしい状況なのである。

「私の顔が見えないことが不満なのかと思いましたが。これで落ち着きましたか?」

小首を傾げてシレッツと言つてのける和馬さんを、キツと睨みつける。

「落ち着くはず不是吗! 離してください!」

そのうちに背中に回されている腕がゆつくりと拘束の力を強め、いつの間にか、和馬さんの腕の中にしっかり閉じ込められてしまっていた。

この頃になると、抵抗する気力もなくなる。

——は、恥ずかしいよ……。でも、和馬さんに抱き締められるのは好きだし……

チラリと目線だけを上げたところ、ひたすら嬉しそうな和馬さんがいる。

ふたたび顔を伏せた私は、もごもごと口を動かした。

「あ、あの、和馬さん……」

「なんでしょうか?」

一向に顔を上げようとしないうちに、彼が優しく問いかけてくる。

「気のせいかもしれませんが……。なんていうか、いつもより嬉しそうに見えます」

それほどまで、今夜のカレーが美味しかったのだろうか。

私の言葉に和馬さんがクスツと笑つて、さらに腕の拘束を強めてくる。

「そのように見えて当然ですよ。今日は、ユウカから嬉しい言葉をたくさんもらいましたからね」

「え? それだけでですか?」

パツと顔を上げた瞬間、和馬さんがすかさず唇へとキスをしてきた。神がかり的に反射神経がい彼は、ほんのわずかな隙も逃さないようだ。う、うう、恥ずかしい。

すぐさま顔を伏せて彼の肩口に顔を埋めると、大きな手がサラサラと髪を撫でてくる。

「ユウカ。『それだけ』だなんて、とんでもない。これまでのあなたを見ていれば、かなりの進歩だと思います。だから嬉しいんですよ」

肩下まで伸びた私の髪を一束掬い、彼がその毛先にキスをした。

横目で窺った和馬さんの仕草はまるで大事な宝物に触れているみたいで、愛おしさが伝わってくるものだった。

「初めは私の名前を呼ぶだけでも恥ずかしかっていたあなたが、こうして気持ちを伝えてくれるようになったではありませんか。それに……」

と、ここで言葉を区切った和馬さんが、私の左耳に唇を寄せ——

「結婚も意識してくださっているようですしね」

と、少し低くてよく響く声で、コソツとささやいてくる。

彼のセリフに、わずかに触れてくる唇の感触に、耳がジンジンするほど熱くなった。肯定することは恥ずかしく、かといって、否定するのは違うと思つて、私は無言で彼の肩口にグリと額を押し当てる。

クスクスと小さな笑みを零した和馬さんは、背中に回していた手を移動させ始めた。やがて彼の手が私の頬に辿り着くと、ゆっくりと上向きにさせてくる。

痛くはないけれど抗えず、私は顔を上げざるを得なかった。

すると、幸せそうな笑みを浮かべている和馬さんと目が合った。

ドキン、と心臓が跳ねる。形のいい切れ長の目で見つめられ、顔から火が出た。

それでも、こんなに綺麗に笑う彼から目を逸らすことができない。

まっすぐ和馬さんを見つめていたところ、触れるだけのキスをされた。

「ユウカ、あなたが好きです」

告白の後、もう一度キスされる。

そのキスは優しく、穏やかで。心臓のドキドキは止まらないけれど、欲情を焚きつけるものはなかった。

羽根が舞うように軽やかで、雪が積もるように静かで。

そのキスはものすごく幸せだった。

おまけに、とびつきり甘い声で「愛してます」とささやかれ、カフェオレに落とされた角砂糖のようにホロホロと溶けてしまう。

広い胸にもたれて甘く幸せな余韻に浸っていたら、頭の上で和馬さんが笑った。

「このままでは、カフェオレが冷めてしまいますね」

食卓でしたものと同じようなセリフが聞こえてきて、私も思わず笑ってしまう。

「おや？ 随分と余裕があるようですね。いつものユウカでしたら、もう少し騒ぎそうなものですが」

「その……、恥ずかしいのは、いつもと同じですけど。でも、和馬さんの、キ……、キスが、ええと……、や、優しいから……。ちょっとだけ、大丈夫、です……」

与えられたキスは彼の嬉しいという気持ちと安心感に溢れたものだったから、そこまで取り乱すことはなかったのである。

「そうでしたか。このように穏やかに過ごすのも、また格別な幸せというものです」

和馬さんの言葉にコクリと頷くと、腰に腕が回り、彼の膝に乗ったままでグリーンと前向きにさせられた。

「今度は邪魔しませんので、カフェオレを飲んでください」

和馬さんも自分用のカップに手を伸ばし、優雅な仕草でコーヒーを飲み始める。

言葉の通り、彼は余計なちよっかいを仕掛けてくることもなかった。私は程よく冷めたカフェオレをじっくり堪能できた。

私は両手でマグカップを持ち、少しずつカフェオレを飲んでいく。ちょうどいい甘さのカフェオ

レが喉を通るたびに、顔の熱さが引いていった。

——それにしたって、私の言葉が嬉しかったからってというのは……

そんなことを言われたら、嬉しくて嬉しくて、私のほうこそニヤけてしまいそうだ。

恋愛に慣れていない私のペースは、和馬さんにとつてまどろっこしいはずなのに。それでも、ちゃんと私のことを考えてくれて。ほんのわずかな成長でも、ちゃんと気付いてくれて。

おかげで、ドンドン好きになってしまう。いったい、どこまで彼を好きになっていくのだろうか。ここで小さな疑問が湧いた。

——初めてお付き合いした人が和馬さんだから、もしかしたら、刷り込みのように、好きになっているだけ、とか？

これまでに他の男の人と付き合い合っていたら、和馬さんのことをこんなにも好きになっただろうか。和馬さん以外の男の人を、彼以上に好きになる可能性があるだろうか。

ぼんやりと、そんなことが頭をよぎる。

コクンとカフェオレを飲み、自分に問いかける。

二口、三口と嚙下し、小さく息を吐いた。

——たぶん、無理じゃないかな。

友達のおくは、ようやく訪れた私の恋を、自分のことのように喜んでくれて、和馬さんのことを絶賛してくれている。

だけど、何人かの友達は別の意見だった。

『初めて付き合い合った人と、結婚まで考える？ もう少し、周りを見てみたら？ 他にいい人と出逢えるかもしれないよ。まだ、二十一なんだし』

真剣な顔で忠告してきた。

意地悪ではなく、私のことを考えてくれた上での意見だ。彼女たちの話も、「そうかな」と思えるかもしれない。

だからといって、和馬さん以外の男の人と付き合い合うつもりはないし、別の男の人を探すつもりもない。

ただ、「結婚を考えるのは早い」という点には、大いに頷ける。

結婚はしたい。できることなら和馬さんと。

それでも、まだまだ先のこととしか考えられない。

——どうして私は結婚に踏み出せないんだろう。

すっかり冷めてしまったカフェオレをコクリと飲む。

その時、和馬さんが私の髪に頬擦りしてきた。

「なんだか元気がないですね。どうしました？」

「え？」

ビックリして固まっていると、「結婚のことですか？」と訊かれて、またビックリする。

「どうして分かったんですか？」

「ユウカにハンコを渡して以来、なにやら考え込む素振りが増えましたので」

「実は友達から、結婚を考えるのは早いんじゃないかって言われて、それで……」

モゴモゴと口にする、和馬さんはつむじにキスを落とした。

「ふふっ、ユウカは真面目ですね」

「そうですか？」

真面目と言われた理由が分からず、首を傾げた。すると、和馬さんがまたつむじにキスを落とす。「付き合い始めて数ヶ月の私たちが実際に結婚をするのであれば、確かに早すぎるかもしれませんが、考えるだけならば、なにも問題ないでしょう？ 結婚したら朝食も弁当も毎日作ることになるかもしれないと、ユウカは言いましたよね？」

「は、はい、言いましたけど。でも、それは『かもしれない』っていうだけで」

「それも、考えているという範疇に入るのではないのでしょうか。考えると言っても、結婚に向けて具体的に行動する訳ではないんですよ。そうやって、何気なく口にすることも含みます。それは、負担になるのでしょうか？」

私は少し考えた後、フルリと首を横に振った。

結婚に向けて式場を探したり、新居を探したりするとなれば、確かに大ごとだ。

でも、「こんな風になったらいいな」と、思い描いていることを言葉にするだけなら、そんなに気負いはない。

——ああ、そうか。私、考え過ぎていたんだ。

和馬さんが『結婚』と口にするたびに、真剣に考えなくちゃいけないんだって思い込んで。それで、自分でも気が付かないうちに尻込みしていたんだ。「あれこれ想像して言葉にしているうちに、結婚に対する緊張が解けてゆくのではないのでしょうか。いずれその緊張が解けた時にでも、結婚に向けて具体的に動き出せばいいだけです。ですから、そんなに怖がらないでください。結婚は怖いものではないと思いますよ」

耳に心地よい声の流れれ込んでくると、変なわだかまりもゆっくり消えてゆく。「そうですね。ごめんなさい、私、単純だから、すぐ考え込んじゃって」

苦笑いを返すと、和馬さんがそっと抱き締めてきた。

「ですが、それだけユウカが私とのことを真剣に考えてくれているという証拠ですからね。私としては、嬉しいですよ」

クスリと微笑かに笑みを零し、彼は穏やかな声で話を続ける。

「想像するだけならば、なにも怖いことではありません。その想像が実現しなくとも、構わないのですからね。安心して、ユウカの想像をたくさん言葉にしてください」

「はい」

「ああ、そうです。そんなに不安に思うのでしたら、練習してみるのはいかがでしょうか？」

和馬さんがふいに楽しそうな声で提案してきた。

「れ、練習？ なんの？」

首を傾げたところ、和馬さんがサイドボードから一枚の紙を取り出した。ヒラリとガラステーブルの上に置いたのは、なんと、婚姻届である。

「ええっ！」

声を上げる私に構わず、和馬さんがテーブルの上にボールペンを置いた。

「さあ、ユウカ。試しに、ここにあなたの名前を書いてみませんか？」

「は!？」

事態が呑み込めずに呆然と紙を凝視していると、ボールペンの横になにか置かれる。

「ちょうどいいことに、ここに『小向日葵』のハンコもあります」

「へ!？」

続いて手際よく差し出されたのは、朱肉だった。

——え？　なんで？　和馬さんが私のハンコを持つてるの!?　っていうか、婚姻届って!?

目を白黒させている私の右手に、彼の大きな手が重なる。

「大丈夫ですよ、ユウカ。練習ですからね、思い切ってください」

——いや、それ、おかしいでしょ。婚姻届を書く練習って、ありえないんですけど!

あまりに突拍子もない彼の言動に、思わず噴き出してしまった。

「あははっ。いくらなんでも、それはやりすぎですって」

和馬さんはきつと、ちょっぴり塞いでいる私を笑わせようとして、こんなことをしてきたのだらう。

婚姻届をいつの間にも用意したのかという疑問が湧くが、もらうだけなら誰でもできるはずだ。今の時代、ネット上からダウンロードすることもできる。

それはさておき、和馬さんはペンもハンコも手に取らない私を、ただ優しい顔で見つめているだけ。

彼が今、本気で私に婚姻届を書かせるつもりなら、もつと強引な手段に出るはずだ。

和馬さんはたまに宇宙的な感覚を発揮するから、この一連の言動は彼らしい冗談に違いない。

「笑ったら、なんか元気になりました」

フニヤリと表情を緩めたところ、さらに強く抱き締められた。

「私としては、練習にかこつけて書かせてしまおうと、割と本気だったのですが。まあ、ユウカが笑ってくださるのであれば、冗談と思われてもよしとしますか」

クスクスと笑う和馬さん。

私が不安になると、すかさずフォローしてくれる優しい恋人。

思考回路が宇宙人で、たまについていけない時もあるけれど。

それでも、やっぱり和馬さんを好きになってよかったなど、つくづく感じたのだった。

婚姻届はローテーブルの端に置き、私はカフェオレを飲み始めた。

カップの中のカフェオレが残り四分の一くらいになった時、和馬さんの手が私の太腿の上で不埒な動きをし始める。

「な、なにをするんですか!？」

慌ててカップから口を離し、振り返った。

すると、和馬さんがニッコリと微笑ほほえんでくる。

「私はコーヒーを飲み終わってしまいましたので、次はユウカを可愛かわいがろうかと」

「どうして、コーヒーを飲んだ後の行動がそうなるんですか!? ……ひゃー!」

注意しているそばから、彼の手がスカートの中に入ってきた。裾すそがふんわり広がっているフレアスカートなので、容易たやすく侵入を許してしまう。

スラリと長い指が膝ひざの丸みを辿り、ゆつくりと円を描き始めた。ストッキングの上から弱い力で撫なでられ、ものすごくくすぐったい。

「やめてくださいよ!」

身を振ひった拍子ひょうしに手の中のカップが大きく揺れ、カフェオレがチャブツと撥はねてしまった。

「ああ、もう。顔に付いちちゃったじゃないですか……」

唇くちびるを尖とがらせ、近くにあってティッシュの箱を片手で引き寄せる。

私がティッシュを引き抜く前に、うしろから伸びてきた和馬さんの左手が私の顎先あごさきにかかった。あつという間に、斜めうしろへと向かされる。

「和馬さん?」

呼びかけると、すぐそばにある彼の目が笑しげに弧こを描いた。

「ティッシュなんて無料ぶなものを使うまでもなく、私が綺麗きれいにしてあげますよ」

「はい?」

どういうことだと怪訝けげんに思っていたところ、和馬さんが私の頬ほに付いたカフェオレの滴しずくを舌しんでべ

ロリと舐なめた。

「はあっ!? ま、ま、待ってください! そんなこと、しなくてもっ」

顔を仰のげ反ぞらそうと力を入れるものの、顎あごを押さえている彼の手はビクともしない。私の首が痛いたくなっただけだった。

「ですが、こうして撥はねてしまったのは私のせいですから。責任をもって、綺麗きれいにしてあげますよ」

確かに和馬さんが変なことをしてきたからそうなった訳だが、だからといって舐なめてくる!?

「い、い、いえっ! ティッシュで拭ふきますから!」

膝ひざを撫なでていた手は止めてくれたけれど、この状況もかなり困る。

そう思い、必死に腕を伸ばした瞬間、顔をさらに上向かされた。

「ああ、こんなところにまで滴しずくが飛んでいましたね」

彼の舌が頬ほから顎あごのほうにゆつくりと移動してゆく。

「早くしないとユウカの服が汚れてしまいます」

口では『早く』と言っているながら、舌の動きはことさらゆつくりだ。徐々に顎先あごさきへと移動しつつも、何度も往復を繰り返している。

「わ、私はお化粧していますし、舐なめたら、変な味でしょ!? それに、化粧品を舐なめるのは体にもよくないでしょうし!」

舐なめることをやめさせようと説得を試みるが、彼はどこ吹く風といった感じで、舌を這はわせ続け

ていた。

「なんとも表現しがたい味がしますが……。まあ、それは仕方ありませんね。先程も言ったように、私の責任ですから。そこは我慢します」

「そんな我慢は、しなくていいですつてば！」

動ける範囲でジタバタもがくと、彼の右腕が私にきつく絡み付いてくる。

「変な味がするからといって、私は自分の過ちから目を逸らすような無責任な人間ではありませんよ」

「こんなところで、妙な責任感を發揮しないでいいんです！ あ、んっ、やめて……」

執拗に舐められているうちに、なんともいえないゾワゾワした感じがうなじの辺りで生まれ始めた。このままではマズいことになりそうな予感満載である。

しかし、思いっきり抵抗したいのに、持ったままのカップが気になって暴れることができなかつた。今の私は完全に手元が見えなくなっているため、カップを置けないのだ。

迂闊に手を下ろせば変な場所に当たって中身が零れてしまうかもしれないし、当たり所によってはカップが割れてしまうかもしれない。

私の服が汚れる程度ならば構わないけれど、万が一、カップの欠片で和馬さんが怪我をしたら大変だ。

それを考えると、ひたすらカップを握り締めて耐えるしかなかった。

顔の輪郭に沿って動いていた舌が、ようやく止まる。

「これで綺麗になりましたよ」

私の顎を捕えていた手を離し、和馬さんが楽しそうな声で言ってきた。そして、両腕でギュッと私を抱き込んでくる。

「恥ずかしさどくすぐつたさを我慢しているユウカは可愛いですね」

チュッと音を立ててつむじにキスを落とす和馬さん。

私はすぐさまカップをテーブルに置き、そんな彼を睨みつけてやった。

「こんな責任の取り方はおかしいです！ 絶対、絶対おかしいです！」

「そうでしょうか？ ユウカは綺麗になりましたし、私は楽しいですし。ほら、お互いにとって利点がありますよ」

「利点があっても、おかしいものはおかしいんです！ もう、離してください！」

このまま彼に抱き締められていたら、もつと恥ずかしい思いをしそうな気がしてならない。

私はプイッと顔を背けて、勢いよく立ち上がって彼と距離をとる。

……はずだった。

しかし実際には、立ち上がったところで和馬さんの腕が素早くお腹の前に回ってきて、グイッと引き戻されてしまったのである。

あえなく、私は彼の膝の上に逆戻り。

「なにをするんですか!？」

足をバタバタと動かしながら、彼の腕から逃れようと躍起になる。全力で暴れているのに、和馬さんはまったく動じた様子もなく、クスクスと笑うばかり。

「ユウカこそ、どうして私から離れようとするのですか?」

「このままだったら、最後までカフェオレが飲めないって思ったからですよ! あと二口分くらい、残っているんです!」

「そういうことでしたら……」

そこで言葉を止めた和馬さんは、体をずらして私をソファへと引き倒した。さらには素早く私に馬乗りになり、左手で肩を押さえつけてくる。

「今度はなんですか!？」

ギョッと目を見開く私の視線の先で、彼が軽く首を傾げた。

「あなたにカフェオレを飲ませて差し上げようかと」

「で、でも、寝転がったままじゃ、カップから零れてしまいますよ!」

「ふふっ、ご心配なく」

形のいい目を細めた和馬さんは、置かれている私のカップを手に取った。

中身を一気に呷ると上体を大きく屈め、なんと、私の唇に自分の唇を重ねてきたのだ。

「ん、んんっ!？」

驚き過ぎて閉じることを忘れた口の隙間から、カフェオレが流し込まれる。

唇はびったりと重なっていて、流し込まれる量も少しずつだったので、口の端から零れ出すことはなかった。

残りたった二口分のカフェオレを、たっぷり時間をかけて口移しで飲まされる。

ところが、そこで終わった訳ではない。

和馬さんと私の口の中からすっかりカフェオレがなくなってしまっても、唇が離れることはなかった。

むしろ、零れるものがなくなった今こそが、本格的なキスの始まり。

彼の大きな手が私の頬を包み、やんわりと、だけどしっかかり固定する。

上からピタリと覆いかぶさり、舌を差し込み、ねっとりとした私の舌に絡む。

巻き付き、吸い上げ、掻き混ぜるたびに、舌の上からカフェオレの味が攫われてゆく。

完全に味がなくなった頃には、飲みきれない唾液によるクチュクチュという水音が私の耳に届いてきた。

震えながら彼のシャツにしがみつく私の顔が、徐々に熱さを増してゆく。

明るいいりピンゲで、しかもこんな風に押し倒されて受けるキスというのは、ことのほか恥ずかしい。

震える手で和馬さんの胸を押し返すものの、絶妙な角度で差し込まれている舌は後退することも無いし、私の上から和馬さんがどく様子もない。

それどころか、クスリと喉の奥で笑った彼が、さらに口内を掻き混ぜてきた。
クチュリ、クチュ……

いつそう大きな水音が響き、カアツと全身が熱くなる。
恥ずかしい。すごく恥ずかしい。

それでも、和馬さんが私をほしがってくれることに、心の奥では嬉しいと思っている。
ちよつと強引だけど、私のことを全身でほしがってくれていることが伝わる彼のキス。そんな甘いキスから逃れることは、とても難しいのだ。

溺れてしまえるならば、そうしたい。

ところが場所が場所だけに、どうしても羞恥心が拭い去れなかった。

ようやく和馬さんがキスを解き、長い腕を回してすっぽりと私を包み込む。私の耳元で、満足そうなため息を零してくる。

「小刻みに震えて私にしがみつくとウカは、本当に可愛いです」

うっとりときさやかかれて、私の耳がチリチリと痛みを訴えるほど熱を持った。

「……和馬さんのバカ」

照れ隠しに彼の肩を拳でポコンと叩くと、彼がクスクスと笑った。

「おや？ 優しいキスであれば、平気なんですよね？ 先程の私は優しくなかったですか？」

私が大丈夫だと言ったキスは、唇同士がそつと触れ合う程度のもので、こんなに深く激しいものではなかった。だから、さつきはなんとか大騒ぎしないで済んだのに。

「……あんまり」

ポツリと零した言葉に、和馬さんがまた笑う。

「そうですか。では、慣れるためにも、もう一度」

私の上から軽く身を起こした和馬さんが、ゆっくりと顔を近付けてきた。

「む、無理です！ こんなところじゃ、絶対に無理です！」

そう言って、パツと手で唇をガードする。

そんな私を見て、和馬さんが一瞬、呆気にとられる。それから、ヒョイと肩を竦めて苦笑した。
「なるほど。そういうことでは仕方がありませんね」

和馬さんは乱れた私の前髪を長い指で梳き直してから、完全に私の上から移動する。
その様子にホツと息を吐く。

……ところが、瞬きを一つする間に、私は横抱きにされてしまった。

「えっ？」

もう一度瞬きをすると、和馬さんは迷いのない足取りで歩き始める。

「あ、あの、どこに行くんですか!？」

「寝室に決まっているでしょう」

問いかけに返ってきたのは、あっさりとした答え。

「なんですかっ!？」

「ここではどうも、あなたの気が散っているように思いました。ですから、寝室に移動するんですよ」

ニッコリと笑顔で言い切り、私の唇をペロッと舐めてきた。

ビクツと身を竦めている間に、和馬さんは寝室の扉を抜ける。

そして体を縮こまらせている私を、壊れ物のように優しく優しく、ベッドの真ん中に下ろした。私の頬にかかった髪を指で払い、和馬さんが目を細める。

「ここならば、リビングのように明るくないですから」

確かに、この寝室は頭の上にあるランプがほんのりと灯っているだけである。

それでも、恥ずかしさがまるつきり消え去った訳ではない。

そのため視線を横に逸らして黙り込んでみると、和馬さんは払った髪をクルリと指に巻き付ける。それから、穏やかな声でささやいてきた。

「ユウカが嫌だと思っているのであれば、これ以上はなにもしません。怒りませんし、呆れもしませんから、ハッキリ言ってくださいね」

その言い方はズルいと思う。

私は嫌がっているのではなく、慣れていないから、ただ単に恥ずかしがっているだけだと、とっくに見抜いているはずなのに。

逸らしていた視線を正面に向けて、チラツと和馬さんを見上げた。そして、またすぐに逸らす。

それでも、和馬さんには私の考えていることが伝わったようだ。フツと声もなく笑うと、すかさず強く抱き締めてきた。

「今の視線の動きで十分に分かりましたよ。恥ずかしいだけなのですね？」

私のことを馬鹿にするでもなく、呆れるでもなく、和馬さんはただただ、優しい声でささやく。わずかに頷き返すと、クスツと和馬さんが笑った。

「私の未来の奥さんは、本当に可愛らしい」

そのセリフに、ほっぺがボンと音をたてて熱くなる。

「あ、あ、あの、今……」

オロオロと泳がせた視線の先で、彼の形のいい眉が片方だけヒョイと上がった。

「おや、奥さんと呼ばれるのは不満でしたか? そういえば、先程の会話では妻と言いましたしね。やはり、妻のほうがよかったですか?」

「い、いえ、そういうことではなくて……」

呼び方ではなく、そういった呼称自体が恥ずかしいのだ。

なのに、和馬さんは一人で話を進めてしまう。

「では、どうしましょうか。世間では女房、かみさんという呼び方もありますが、それらはユウカには、どうもそぐわない気がします」

「だ、だから、そういうことではなくてですね……」

なんとか彼の発言を止めようと考えてるが、いい案が浮かばない。火照る顔のまま視線ばかりを泳

立ち読みサンプル はここまで

がせていると、和馬さんがニコツと笑った。
「ああ、そうです。若い世代の方は自分の伴侶のことを『俺の嫁』と呼んでいると、耳にしたことがありますよ」

ここで、ほっぺの熱がさらに上がった。
ただでさえ照れくさいのに、滅多に聞くことのない和馬さんの「俺」発言に、グングンと熱が上がつてしまう。

「えっと、その、ですから……」

羞恥の涙が込み上げてきたところで、少しだけ彼の表情が曇った。

「すみません、ユウカ。私としたことが、失言でした」

なにが、どう失言だったのだろう。とりあえず、その気恥ずかしい呼び方さえやめてくれればなんでもいいけれど。

という私の心情とは裏腹に、和馬さんが口を開いて言ったことは……

「嫁という言葉は夫側の両親が使うもので、奥さんという言葉は人様の配偶者を呼ぶ時のもの。ですから、やはり妻と称するべきでしょう。失礼しました」

彼は一人で納得したように、何度も小さく頷いている。そして、「あいさつ回りの際は、『妻のユウカです』という紹介が一番しつくりきますね」と満足そうに呟いた瞬間、私のほっぺはこの日の最高温度を記録した。

「もう、もう、和馬さんのバカ！ どうして私が恥ずかしがることばかり言うんですか！」

うつすらと涙が浮かぶ目で睨みつけると、対照的に蕩けそうに甘い視線を向けられる。

「あなたを困らせるつもりはなかったんです。今夜は、自分でもどうしようもないほど、浮かれているようでしてね」

私の瞼にチュッと音をたててキスを落とした和馬さんは、「怒らないでください」とささやき、今度は頬にキスを落とした。

「結婚どころか恋人を作ることすら望まなかった私が、将来を共にしたい女性と巡り合った。さらには、その相手が私との結婚を考えてくれていると分かれば、どうしたって浮かれてしまうものではないでしょうか？」

問いかけられても、恥ずかしさが収まらない私は唇を尖らせてプイッと横を向く。

私の態度に、さすがの和馬さんも気落ちしたようだ。

「ユウカ、本当にすみませんでした。あなたが嫌がることはしたくありませんので、今夜はこのままにもせずに……」

彼が最後まで言う前に、私は和馬さんに視線を向けた。睨みつけるのではなく、照れくささを存分に含んだ視線を。

すると、感極まった声が降ってきた。

「ああ、ユウカ。なんと可愛らしい誘い方でしょうか……」

誘ったのではなく、言葉にできない代わりに視線を向けただけ。

それなのに、和馬さんは大げさなほどに喜んでみせてくれる。おかげで私は余計な緊張から解放